

JOCV千葉OB会報

2018年1月
No. 93

新年号

1. 年頭所感 “協力隊よ、どこへ行く” 第2弾

謹賀新年、平成の時代が今年を含めて後1年と4ヶ月になることが決まりました。そんな中、昨年秋に行われた「行政レビュー」でとんでもない議論が行われていることを知りました。協力隊事業は税金で賄われていますので、行政レビューの俎上に乗ること自体は全く問題はありません。問題は評価の中身です。インターネットで検索したら、「40歳という年齢で一律に区別されていることを問題視、専門性に基づき手当てや生活費などを細分化するよう求める。」との有識者のコメントを見つけました。

「はあ〜？」と直感的に思いました。「評価者による取りまとめ内容」の「論点」として以下の3つ挙げられています。①ODAとして開発途上国の経済、社会の発展に寄与しているか？成果を「定量的」に評価できているか？②ボランティアの手当ては適正な水準か？③NGO支援などほかの方法もある中、JICAによるボランティア派遣は効果的・効率的な方法となっているか？

一番目の「定量的」にも驚きました。ボランティアの成果を定量的にどう評価できるのでしょうか？「できる人がいたら連れて来い！」って言いたいくらいです。古典となっている協力隊三部作の一つに、「協力隊員はトンネルの真ん中堀り」と書かれています。環境劣悪な開発途上国で悪戦苦闘、もがき苦しんだ2年間を経験した隊員は大勢います。この隊員の活動の成果は何だったのでしょうか？定量的に測れるものなのでしょうか？

確かに協力隊事業は隊員の自己満足に終わってはいけない事業です。JICAが「帰国隊員の社会還元」を声高く叫んでいるのもうなずけます。確かに、隊員の評価は相当以前から課題ではありました。何を以て正当な評価と言えるか、どう評価するかなど、成果と評価は悩ましい問題なのです。平成15年に新生JICAとなり、協力隊事業の位置づけは大きく変化、従来の「技術協力と日本青年の育成事業」から、「国民参加型事業」へと主旨が全く変わりました。50年以上も継続している事業ですから、変化して当たり前、どう変化するかが問われています。協力隊事務局では初の女性局長の下、事業の見直しが行われているとも聞いています。今や女性隊員の方が多く、職種も

見直され、要請内容も変化していますが、行政レビューにある論点に事業実施者たる事務局はどう答えているのでしょうか？現在区分されている4つのボランティアはその成り立ちが全く異なるものです。それを正しく理解している事務局職員を始めとする関係者はどのくらいいるのでしょうか？JICAの常識は世間の非常識となっていないか、今まさに問われているような気がします。ただ、30年以上も協力隊事業を中心にJICAに携わった者としては、民主党の事業仕分けもひどかったが、今回の行政レビューの結果を知り、有識者に協力隊事業を正しく理解させられない事務局関係者についたため息が出てしまうのです。

この際あえて言わせていただけるならば、世間から色々な指摘や批判が出ている今だからこそ、「ボランティア事業の統合」が一番分かり易い、これからの50年に向けてのボランティア事業の在り方ではないかと思います。

隊員時代を思い出してください。アメリカンピースコーやブリティッシュボランティアなど日本以外はシニアから若者まで全員同じ待遇で一律に活動していました。日本だけが設立最初は20歳から35歳までの若者の事業として協力隊事業を立ち上げ、40歳未満に年齢を引き上げ、その後、ご都合主義で日系やシニアなどのボランティア事業が加わってきました。

ガラガラボンで全てを統合した方がどんなにすっきりすることでしょう。JICAからも独立した方が良いかもしれません。

青年海外協力隊千葉OB会
会長 浜田 真一
(昭和51年度2次隊前期)



【タンザニア国境近くの農業隊員宅を訪問】

目次

1. 会長 年頭所感 “協力隊よ、どこへ行く” 第2弾

2. 報告事項

3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

H28-3	中山 貴嗣	ラオス	衛生工学	千葉市
H28-3	小林 恵	キルバス	看護師	船橋市
H28-3	道口 摩邪	マレーシア	青少年活動	鎌ヶ谷市
H28-3	中村 藍子	ボツワナ	ソフトボール	佐倉市
H28-3	富澤 宏貴	キルギス	PCインストラクター	君津市
H28-3	坂口 航	ウガンダ	PCインストラクター	市川市
H28-3	工藤 幸介	エチオピア	コミュニティ開発	銚子市
H28-3	長尾 大輝	コスタリカ	環境教育	印西市
H28-4	藤岡 功平	タイ	日本語教育	千葉市
H28-4	小林 三恵	マダガスカル	青少年活動	市川市
H28-3	木村 由佳	ラオス	環境教育	白井市
H28-4	小林 英景	バヌアツ	栄養士	八千代市
H28-4	佐原 光	ガーナ	数学教育	浦安市
H28-3	松山 倫子	モザンビーク	数学教育	流山市
H28-4	松井 香保里	バヌアツ	看護師	船橋市
H28-3	竹中 由里子	ボツワナ	作業療法士	佐倉市

4. 協力隊ナビあれこれ

5. 年会費納入に当たってのお願い

6. 編集後記

☆お知らせ

2. 報告事項

1) JOCA 関東ブロック会議について

毎年秋恒例の関東ブロック会議が11月4～5日伊豆大島にて開催され、当会からは西村邦雄事務局長と高梨直季書記の2名が参加しました。ブロック会議は各県が毎年持ち回りで開催され、本年度は東京が当番でしたので、都会で開催するより空気も良い伊豆大島で開催すれば気分もすっきり、議論も深まると幹事県が考えたようです。本年度末にはJOCA本部が駒ヶ根市に移転することが決まっており、財政厳しき折、経費が心配でしたが、各県代表者（原則的に評議員1名）には交通費等が支給され、複数名の場合は参加県の自己負担なのですが、来年度の当番県は千葉ですから、できるだけ多くの役員にブロック会議の雰囲気味わってもらい、来年度千葉開催に備えるため、昨年度に続き複数名の参加としました。初日は各県からの活動報告、ミャンマーファミリークリニックと菜園の会（MFCG）代表 名知仁子（なちさとこ）先生（医師）の講演、ディスカッション、その後の親睦会と大変盛り上がりしました。また2日目は

JOCAの様々な活動が報告されました。来年度の開催地は今年度同様、温泉地の希望が多数あり、春頃までには決定する必要があります。



【参加者集合写真】

2) 協力隊ナビについて

協力隊ナビは、協力隊に関心があり、受験したいと思っている方々にとってはとても有意義な応募相談の機会です。当会では毎月第4土曜日の14時から16時まで浦安市国際センターにて開催しています。相談員は元 JICA 職員で駒ヶ根訓練所長でもあった平澤昭男 OB（S43-2、フリピン、稲作）がライフワークとして引き受けていただいています。相談者ゼロの月もたまにありますが、毎年4〜5名程度の合格者があり、相当の実績を上げていると自負しています。ただ、昨今は応募者の減少に食い止めがからず、OB 会には協力隊の灯を消さないように支援することが求められていますので、皆さんの周りにいる志ある青年の発掘にご協力ください。尚、平澤相談員からの寄稿文を

後段で掲載しましたので、お読みください。



【協力隊ナビの様子】

3. 現地活動レポート（派遣中隊員寄稿）

H28-3 中山 貴嗣 ラオス 衛生工学 千葉市

ラオス国立大学の環境科学部に配属され9ヵ月が経とうとしています。具体的業務は①環境マネジメントシステム(EMS)の授業の開講②自然資源管理の授業の補佐③水質分析実験室の改善の3つです。ラオスの教育機関の中枢に位置する大学なので、先生は海外で研究をして帰ってきた先生が多く、生徒も基本的には優秀です。ただし、政府からの賃金の割り当てが低く先生のモチベーションは高いとは言えません。また、学生も農村部出身の子は英語があまり話せないのが、基本的にはラオス語で授業する必要があります。まだ私のラオス語の能力が小学1年生程度なので英語を混ぜて授業を実施している状態です。

任地のビエンチャン市はアセアンの中でも一番ゆったりとした首都です。私は市内の中心部から車で40分程度の所の大学に勤めておりますが首都と感ぜさせないほど、のどかです。治安がよいので、そういった意味では日本とかわらない感覚で過ごしています。ラオスの人はみな仲良しで、大学生同士が肩を寄せ合いながら授業を聞いています。よく東南アジアの市場では吹っ掛けてくるので注意が必要と言われるのですが、ラオスではそれが少ないです。タクシーと外国人向けの店を別にすれば、私は高い値段を言われたことはありませんし、逆に間違えて多く払ったりすると、必ず向こうから返してくれます。ただし、仕事に関してはのんびりを超えてゆるゆるな所が面白いです。お客さんがいても、商品を並べる台の上でお母さんが寝ていたり、肘をついて遠くを見ていたり4〜5人で集まってご飯をたべてキャッキャ歓談していることが結構ありました。

タイに旅行に行ったことが、とても印象に残りました。

ビエンチャン市の直近の都市であるタイの地方都市ノンカイ市にいったのですが、衛生環境が良く、どこかの店員も、一生懸命仕事をしていることが印象に残りました。また物価もラオスより安く隣国タイのすごさに圧倒された覚えがあります。バンコクは説明の必要のない都会です。個人的な感覚としては恐らくビエンチャンとは35年位差があると言っても過言ではないのかと思います。

その他私は、会社員時代に忙しくてできなかったことをヴィエンチャンでやっています。合気道や柔道・中国語といったことに果敢に挑戦し、張りのある生活をしています。また、カウンセラーパートとはとても仲が良く、公私ともに良い付き合いをさせてもらっています。



【凱旋門前にて】



【大学で講義をしている様子】

各家族の繋がりと同様に、各集落や各教会ごとのコミュニティがある。ここには人々の繋がりが密でありお互いに支え合って生活している素晴らしい文化がある。

キリバスの日常での行事で大きいものは、1歳と21歳の誕生日、長女の初潮のお祝い、結婚式である。これら行事は、親戚・近所の人々と共に盛大にお祝いする。お祝いの時には親戚間でそれぞれに招待客に振舞う食事を分担して準備する。たいていは、自宅で準備した食事をボール（洗面器）に入れ会場に持参するため公共の交通機関であるバスでは、休日には洗面器を持った人々を多く見かける。お祝いの席では、伝統のダンスや歌を披露し皆で食事を楽しみ、普段以上によく笑いよくしゃべり、賑やかに過ごす。

南国ならではの人々のおおらかさと第2次世界大戦以降は紛争、戦争に巻き込まれる事もなく大変平和な国がキリバス共和国である。

H28-3 小林 恵 キルバス 看護師 船橋市

2017年1月から、太平洋の赤道直下に位置する3つの諸島（ギルバート諸島、フェニックス諸島、ライン諸島の一部）と小さな環礁からなるキリバス共和国に看護師隊員として派遣され活動している。近年では、国土の大部分が海拔1～4mにあるために、気候変動による海面上昇により国土の浸水、水没問題が国際的に注目されている国の一つである。主要産業は、漁業とココナッツを利用したコブラの生産が中心で、大部分の土壌はサンゴから成るため農作物の育成には不向きで、ほぼすべての食料品と水（ミネラルウォーター）・燃料等の生活物質を輸入に依存している。

食生活は、以前は魚・プレットフルーツ、ココナッツなどが中心であったが、海外からの輸入による米、小麦粉、砂糖がキリバス政府による価格統制により低価格で購入できるようになり、更にインスタントヌードル、スナック菓子が身近になり食生活が大変変化した。

人々は明るく朗らかで、子供が大変多い。どこに出かけても、たくさんの子供たちを見かけ、特に外国人を見かけると「マウリ！」（キリバス語でこんにちは）と必ず声を掛けられる。子供だけでなく大人も老人も笑顔で声を掛けてくれる。

キリバスの文化として第一に感じる事は、家族の繋がりが強く家族をととても大切にする事だと思う。活動の中でも身をもって感じるのが、病院受診の際には必ず数名の家族が同伴し、入院中の患者には常に家族が寄り添っていることである。親子のみではなく、近しい親戚同士で同居しているケースも多く大抵は、10人前後で生活している。



【結婚式でのダンス】



【子供たち】

H28-3 道口 摩邪 マレーシア 青少年活動 鎌ヶ谷市

生涯学習-学び続ける楽しさによるこび-

私は、サラワク州クチンにあるサラワク州立図書館で活動しています。活動職種は青少年活動です。図書館利用者の増加を目的に、アクティビティの企画・運営を行っています。主に子供を対象に放課後や学校が休みの期間を利用して、図工や音楽、読書にフォーカスを当てたアクティビティを実施しています。日本人移住者が多いマレーシアの中でもクチンは日本人が少ない地域です。そのため、日本人と出会う機会はめずらしく日本の伝統的な遊びや日本語学習など文化交流活動も積極的に行っています。サラワク州最大規模の図書館ですから、私の企画以外にも様々なイベントがおこなわれています。しかしながら、『生涯学習』という考え方はまだ認知度が低く、ただ楽しいだけの時間になっているのが現状です。子供たちには、学校教育とは異なる自由で楽しい学びの時間を経て、新たな興味や自分の才能に気が付いてもらえるような活動を展開していきたいと思っています。また、大人の利用者には学校教育を終えた後も人生を豊かにする楽しい学びがあることを知る機会を作りたいです。

猫の街クチン

私の任地は、ボルネオ島に位置するマレーシア最大面積をほこる州サラワクの州都クチンです。マレー語で猫を意味する KUCING と 街の名前 KUCHING の綴りが一文字違いなこと、発音が同じということで猫の街という愛称をもっています。街中には猫のモニュメントや壁画が数多くあり、キャットミュージアムなるものまであります。猫好きにはたまらない街でしょう。クチンは州の面積とは対照的なコンパクトシティです。街の真ん中にサラワク川が流れ、川沿いのウォーターフロントを中心に観光スポットが広がっています。街中に宿をとればほとんどの施設を徒歩で回ることが可能です。街中は様々な時代、民族の文化が交じりあい白人王統治時代の建物や中華寺院、モスクなど一度に楽しむことができます。川は橋もしくは小舟を利用し行き来することができ、ウォーターフロントから向こう岸に渡ると商業的な雰囲気が一転して KAMPUNG（マレー語で村、田舎の意）エリアとなり、なんだか懐かしい景色が広がります。郊外に足を延ばせば、トレッキングを楽しむことができるパコ国立公園やオランウータンの保護施設、原住民族の暮らしを体験・見学できるカルチャービレッジなど街中とは違うアクティビティを楽しめます。サラワクラクサやコロミー、カラフルでかわいらしいケーキラピスなどクチンなら

ではの料理もあり、旅に欠かせない食も充実しています。ボルネオ島といえばお隣サバ州コタキナバルが有名ですが、是非サラワクにもお越しください。



【1.ボルネオのオランウータン】



【2.サラワク名物コロミー】



【3.クチンのシンボルキャットスタチュー】



【4.手作り布絵本で読み聞かせ】

H28-3 中村 藍子 ボツワナ ソフトボール 佐倉市

《ソフトボール革命&人生巡業 in ボツワナ》

2017年1月、ボツワナへ赴任。2月より Botswana Softball Association へ配属され、早10か月。ボツワナの歴史は浅くまだ創立51年。ソフトボールの歴史は40年、そしてそれは国技の1つでもある。

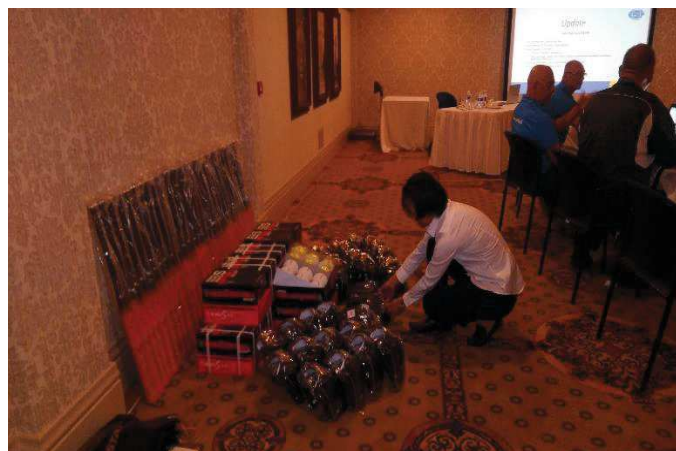
指導者としての活動は充実しており、7月の男子世界選手権では守備コーチとして帯同しボツワナ初のトップ8入りを果たす。その成果を認められ、大統領邸にて昼食会に招待いただき、カーマ大統領とお話する機会を得る。また、10月にはWBSC総会がボツワナのハポロネで開催され、日本ソフトボール協会の皆様（徳田会長、宇津木副会長を始めとする7名）のホスト的立場として総会期間中帯同し、世界に対し発言する機会も頂いた。現在はBSA独自の草の根支援のため、7-13歳、14-19歳を対象に基礎プログラムの作成中。ボツワナではソフトボールは国技だが基礎が全く確立されていない為、国全体のレベルアップを望むのであれば基本技術の定着は必須であり、このプログラムの成功にボツワナソフトボールの将来が掛かっているといえる。また、2018年8月に千葉県で開催される女子世界選手権、2020年東京五輪に向けて代表チーム強化の一端も担っている。

生活環境にはほとんど苦労することは無く、日本食レストランは無いが中華ショップ、スーパーマーケット、イタリアンレストラン、インドカレー屋、ファストフードなど選べるほどある。沢山という店数では無いが、不自由は無い（これは私が首都に住んでいるからでもある）。地方へ行けば、シャワーが無くバケツから汲んで水浴びしたり、基本的に洗濯は手洗い。停電なんかもしょっちゅうである。個人的にはそれもウェルカムだ

が、今の活動考えると首都で有り難く思う。

人々は皆フレンドリーで誰に挨拶しても笑顔で返してくれる。ポツクリの様な商売もほぼ無い。基本的には皆良い人に見える。その分距離が近く会えば「それちょうだい」がストレスに感じたり、構って欲しくない時のスキンシップや真剣な時のジョークにイラッとすることもあるのだが…。ポツワナは日本と違い仕事が少ない分、仕事に追われることも無く（だから余裕がありフレンドリーなのか）、時間がゆっくりと流れている。その感覚は今の日本に必要なことかもしれないと感じる。

活動が充実して有り難い反面、隊員同士で旅行へ行くこともままならず巡回指導以外で国内を回ったことがない、という寂しさを感じるようになった。それが今の悩み（笑）



【WBSC 総会にて JSA よりアフリカ全土へ寄贈する用具のセッティング中】



【宇津木監督特別セッション後の地元チーム BEARS と】

H28-3 富澤 宏貴 キルギス PCインストラクター 君津市

2017 年からキルギス共和国の Cholpon-Ata 市にある小中高一貫校で PC インストラクターとしてボランティア活動をしています。日常は情報科の授業のサポート、情報科教員に対しての指導、IT クラブでの生徒への指導、学校全体の IT 設備の改善等を行っています。現在は特に情報オリンピックの地区予選の時期で、IT クラブでプログラミングを指導しています。

キルギスの IT 事情はまだ発達しているとはいえず、設備の面、指導者の面でも途上と言えます。校内で使用されているコンピューターは 10 年前のもので、いつ動かなくなってもおかしくない状態で日々メンテナンスが必要です。教科書も揃っておらず、生徒は教員が黒板に書いたことを書き取るという授業のスタイルです。情報科教員のみならずキルギスの教員採用システムとして、専門的な知識がなくても教員になることができるため、生徒に対して十分な指導ができていないという状況です。特に地方の村へ行くと、教員もしくは設備が揃っておらず情報科の授業自体が行えないということも珍しくありません。

普段の活動で意識していることはボランティアがいなくなっても任地の人々が継続して行えるようになることです。ボランティアの派遣期間は 2 年という定められた期間であり、本当の意味での活動の成果はその派遣期間が終わってからだと思います。そのためには指導者への指導が一番の責務であり、日々四苦八苦しながら自分の持つ知識を伝えるように努力をしています。

情報科の他にも、午後の時間を使って日本語に興味がある生徒に対して日本語の指導をしています。キルギスには他国に興味を持つ人々が多く、その中でも日本を好意的に受け止めてくれている人が少なくないです。また、旧ソ連圏の影響で日常的にロシア語とキルギス語を話す彼らは、言語に対して適応能力が高く、日本語を指導している際には驚くことが多いです。「上を向いて歩こう」を生徒に教えた際には、数日で歌詞を暗記して歌えるようになってしまいました。

印象に残るキルギスの習慣といえば、家族を大事にすること、お年寄りを大事にすることです。何よりも先ず家族、一に家族、二に家族・・・といったように生活の中心は全て家族です。学校の生徒の兄弟が海外に留学しているのですが、毎日電話は欠かさないそうです。また、お年寄り、特に女性はキルギスで頂点に立つ存在であり、とても敬われています。乗合バスでは必ず席は譲りますし、彼女たちの言うことは皆必ず耳を傾けます。この 2 つはどちらも現在の日本では失われつつあるもので、

日本も見習うべきことであると思います。



【日本語を教えた生徒がクラスで日本語プレゼン中】



【学校の生徒とともに】

H28-3 坂口 航 ウガンダ PCインストラクター 市川市

2017 年 1 月より、アフリカ東部のウガンダに PC インストラクターとして派遣されています。現地の中高等学校に配属され、そこでパソコンの授業を受け持っています。この記事を書いているのが 2017 年 11 月なので、もうじき 1 年を迎えようとしているところです。紙幅の都合で多くを書くことはできませんが、今回は私の住んでいる町をご紹介します。

私の暮らす町はカユンガ県のカユンガというところなんです。地図で探していただくと、ウガンダの首都カンパラを起点に、北東に約 65 キロのところにあります。ウガンダには、かのナイル川の源流が流れていますが、カユンガ県はそのナイル川の東側に接しています。

さて、このカユンガという町の一つの特徴は、イスラム教徒

の方が多いいということです。町の中でモスクを見かけることが多く、私が活動する学校もイスラム系の学校で敷地内にモスクがあります。ウガンダ全体ではイスラム教徒が1割程度を占めるそうですが、カユンガでは私の感覚ですが3割位いるのではないかという印象です。それほど、町を歩くとイスラム教徒の方を多く見かけます。

ウガンダでは町行く人々が気さくに声をかけてくれるのが良いところだと日々感じっていますが、それもカユンガだと一風変わったところがあります。ウガンダでは公用語の英語とは別に、現地の言語が生活言語として使われています。地域によって異なりますが、カユンガを含む地域ではガンダ語という言葉が話されています。そのため英語だけでなくガンダ語で挨拶を交わすことが多いのですが、カユンガではアラビア語で挨拶をしてくれることもよくあります。この点も、イスラム教徒の方が多く住んでいるが故ではないでしょうか。ウガンダにいながら、英語にガンダ語も学べ、なおかつアラビア語も知ることができる。他では味わうことのできないカユンガならではの経験です。このようなカユンガの町は、目下、町中の道路の大工事が執り行われています。私が着任した当初は、車やバイクが穴だらけの道を土煙を巻き上げながら走り、雨が降れば道が川に変わるような状況でした。それがある日突然、道がならされ始めたと思っているとアスファルトが敷かれ、道の脇にはしっかりとブロックで保護された水路が設けられ、みるみる町が様変わりをしています。まさに現在進行形で変わっていく町。その変化を町の住人として見るができる。これもまた楽しからずや、隊員ならではの経験をすることができています。

私が日本へ帰国するころにはどんな町になっているのだろう。10年後、20年後にこの町は、この国はどうなっているのだろう。私はそれを楽しみにしていきたいと思います。



【学校内のモスクでお祈りする生徒たち】



【道が整備され、水路が設けられているところ】

H28-3 工藤 幸介 エチオピア コミュニティ開発 銚子市

私の任地ディレダワは、エチオピアの首都アディスアベバから東へ飛行機で1時間弱。距離にして約500km。カラッとした風に砂ぼこり舞うこの町で、市の雇用促進及び食料安全保障事務所に配属されております。この事務所の主な目的は零細・小事業の支援を通して雇用を拡大し、町の失業率を低下させること。大麦パスタを自作販売するおばちゃんやキオスクの一人店主といった零細・小事業を営む人々を始めとする町の様々な方と関わり、いかにしてこの町の雇用拡大に貢献できるかを考え、活動する日々です。

さて私の任地ディレダワは、エチオピア正教が根付くエチオピアでは珍しく、イスラム教徒が人口の多数を占めると言われます。おかげさまで、エチオピアの食と言ったらインジェラ！ということもなく、お米やパスタがメインのほどよくスパイスの効いたソマリ料理を堪能する日々です。また町の成り立ちもユニークで、20世紀初頭にジブチ港とアディスアベバをつなぐ鉄道の間地点として建設されました。当時、鉄道敷設を主導していたフランス人が多く居を構えていたり、第二次世界大戦後にイギリス軍が駐屯していたりと、多くの外国人が町を出入りしてきました。このような歴史的、文化的背景も手伝ってか、ディレダワの人々は寛容であり、明るく社交的です。

しかし残念なことに、その社交性は仕事面ではあまり活かされておりません。例えば、仕事が増えるという懸念やアイデアを盗まれてしまうという不安、このような理由から、他者と仕事について話をする場面が少ないのです。従って、新しいアイデアや改善策も生まれにくく、また互いの協力体制も乏し

いので仕事の効率も良くありません。たださえ資本の限られている零細・小事業。だからこそ、協力し合いながら互いの事業を拡大する努力が必要になってくると私は考えるのですが。

このような状況を打開するべく私は現在、ワークショップを通して事務所スタッフに対し、事業主間の関係構築といった問題の再認識や新しい解決策を共に考える機会を創っています。また同時並行で、実際に交流会を開催して試行錯誤を重ねつつ、この町に適した交流会の形を模索しております。

総じてここディレダワでは、これまで当たり前だと思っていた物事や思いも及ばなかったことについて、改めてより深く考える機会に恵まれております。自分自身と向き合う時間も長いのです。アイデアを基にどのように行動していけるのか。これは私自身の大きな課題でもあります。自分自身もまた一つ成長できるよう、引き続きこの機会を大いに活用していきたいです。



【知人の結婚式での昼食】



【女性起業家グループに向けたワークショップ】

私は首都サンホセ市の市営リサイクルセンターにて、環境教育隊員として活動しています。今年から高倉式コンポストセンターも稼働を開始しました。その中で私は、両センターのマネジメント業務と、高倉式コンポストの普及活動を行っています。特にコンポストは需要が高く、9ヶ月間で合計630名以上にワークショップを行い、100個以上の家庭用コンポストを配布しました。今年の11月には、高倉式コンポストを発明した高倉弘二先生がコスタリカにいらして大規模な研修を開いていただきました。今後は市民の継続利用、利用者からのリーダー育成を課題として活動していきます。

一方、生ゴミ処理だけではなく、資源ゴミの資源化も同時に進めなくてはなりません。4Rのワークショップを行ってききましたが、市民のゴミ分別の習慣がなければゴミの資源化と減量化は進まないと感じました。逆に、ゴミ分別習慣があれば、回収量がふえるためリサイクルもコンポストも発展すると思います。

そこで、私はBASURECONOMIAというゴミ分別を誘発するアイデアを生み出しました。この事業では生徒に各家庭から資源ゴミを学校に持ってきてもらい、それをリサイクルセンターが引取ります。そして、その資源ゴミ回収量に応じて、企業の協力を得て教育関係の品をその学校に提供するというものです。IBMの提携会社のGBM社にこの事業を紹介したところ、CSRの一環で学校に50台のパソコンを提供したいといっていたので、パソコンを資源ゴミ回収のインセンティブとして本事業を開始させました。既に2校がこの取り組みに意欲的で、トライアルを実施したところ、100%の子供たちが資源ゴミを各家庭から持ってきました。驚いたのは若干6-7歳の子供たちが取り組みを理解し、親に説明をして資源ゴミを学校に持ってきた点です。将来のためにも最も効果的なのは子供たちに向けた環境教育と、彼らによる自発的な分別習慣構築かと思います。今後さらに本事業を発展させ、子供たちによる分別習慣の確立、国内のゴミ排出量の資源化、減量化が大幅に進めば、これ以上に嬉しいことはありません。

コスタリカは他の中南米の国に比べ治安がよくインフラも整っており、比較的安定した中進国です。水道水も飲料可能で未だお腹を壊したことはありません。

伝統的な食事はガジョピントと呼ばれる豆とご飯を混ぜたものでほぼ毎食食卓に並びます。コスタリカの朝は早く、大体5時半には起きて学校や仕事に行きます。早起きが苦手な私はこの点苦労しました。コスタリカ人は仕事後や休日は家族と過ご

すことが多く、家族思いなところも彼らの特徴です。コスタリカは国土の25%以上が国立公園となっています。その豊富な自然から全世界の5%程度の動植物が生存する生物多様性の国で、世界各地から多くの研究者と観光客が訪れます。豊富な自然と家族思いな暖かい国民性がコスタリカの特徴といえます。

私はコスタリカでフェンシングを行っています。現地でフェンシング活動に協力している理由は、同フェンシング協会がJICAにボランティアの要請を出していたものの、日本から人材を確保できなかったためです。私は日本でフェンシングをやっていたのと、アメリカでの指導経験があるため活動に参加させていただいています。今年の4月にはコスタリカの全国大会で個人戦準優勝を果たしました。その結果も寄与して選手からの私への関心は高く、彼らと食事や飲みに行く機会も多く親交を深めることができます。9月には女子のワールドカップが開催され日本のチームも参加し、その支援をしました。また、コスタリカの日本大使館が外務省草の根無償資金協力で練習台を寄付し、国体の際には、大使を呼んでセレモニーが開催されました。コスタリカのフェンシング界における日本のプレゼンスは非常に高まっているといえます。引き続きコスタリカのフェンシング活動に協力し、その発展に貢献していきたいです



【新しいゴミ分別アイデア「BASURECONOMIA」をIBMの提携会社に紹介。同プロジェクトは来年より本格始動】



【フェンシングの全国大会で個人戦準優勝 コスタリカ大学フェンシング部として出場】



【高倉先生による高倉式コンボストの研修実施。コスタリカ、パナマ、ジャマイカ、ベリーズから総勢60名以上が参加】

H28-4 藤岡 功平 タイ 日本語教育 千葉市

私は現在、タイの首都バンコクから約600km離れた東北地方の街、ムクダーハーン県という所で活動している。ここはメコン川沿いに位置する静かな地方都市だが、タイとラオスを結ぶ橋がある国境沿いの街という一面もある。私の配属先はその橋の桎にある中高一貫の公立学校で、そこで私は高校1年生から3年生に日本語を教えている。赴任してから約半年が過ぎた。初めて配属先の学校へ来て、数日後にはもう生徒の前で教える機会をいただいた。それ以来、日々の授業や日本語コンテスト

の指導など、目まぐるしく新しいことが舞い込んできて、それを一つ一つ試行錯誤しながらやっているうちに、あっという間に半年が経った。ただ、忙しいという感覚ではなく、同僚のタイ人の先生や生徒と共に、楽しく活動できている。

しかしながら、この半年間、日本語教師として授業をすることだけの最低限の活動しかできていない。このままで良いのだろうか…と考える時もあるが、そんな中でも、生徒に良い変化も見えてきた。それは、ある生徒が自ら「放課後に日本語を勉強したい」と言ってきたのである。些細なことだが、とても嬉しい瞬間だった。生徒達も、徐々に私に慣れてきて、話す機会も増えてきた。そして、生徒達がなぜ日本が好きかなど、考えていることも少しずつ分かってきた。中には将来日本で働きたいと思っている生徒もいる。バンコクへも行ったことのないタイの田舎の高校生が、「日本のことをもっと知りたい」「日本へ行きたい」と言っているのを聞くと、もっと頑張らなければという気持ちになる。私の活動期間はあと一年半ほど。残りの期間、生徒たちと日本の架け橋となれるような活動をしていきたい。メコン川の流れるように、ゆっくり焦らず。まだまだ試行錯誤の日々は続く。



【雨季の時期に作ってて坊主を作りました】

ここでの生活を一言で言うと「居心地がいい」。タイ人は親切な人が多く、タイ料理もとても美味しい。正直、タイで生活していて、あまり「異国へ来たなぁ」と感じることは少ない。同じアジアの国だからなのか、タイ人の人々には親近感を感じることが多い。例えば、職場での上下関係が厳しかったり、本音と建前があったりと、日本人と似ている部分が多い。ただ、もちろん日本と大きく異なることもある。その一つが、「先生への敬意」である。タイには「先生の日」があり、その日は各学校で行事が行われる。その際に、生徒が先生へ花などを渡し、床

に跪いて深々と頭を下げる。その際に、涙を流す生徒もいる。その光景を見た時ばかりは、さすがに日本とは違うなと感じた。



【「先生の日」に先生に頭を下げている生徒】

H28-4 小林 三恵 マダガスカル 青少年活動 市川市

マナオーナ！（マダガスカル語でこんにちは！）アフリカ大陸の東側、インド洋に浮かぶ島マダガスカルで活動をしています小林三恵（こばやしみえ）です。千葉県市川市出身で、高校時代まで市川市で過ごしました。大学で国際関係学を専攻し、約3年間民間企業で働いた後に念願の青年海外協力隊に応募しました。今年の4月に日本を出発してから、早8ヶ月が経ちました。今日は、この場をお借りしてマダガスカルと任地での活動について紹介させていただきたいと思います。

マダガスカルは日本の約1.6倍の広さを持つ、世界で4番目に大きい島国です。希少生物のウォキツネザルや独特な形をしたバオバブの木など固有の動植物が有名です。また、産業ではバニラが有名で、世界の総生産量の60%を占めており、日本へも輸出されています。実際にマダガスカルに来て感じたことは、アフリカよりもアジアに近い国であるということです。もともとインドネシアやマレーシアから民族が移動してきたということもあり、肌の色、髪質、体格等を見て“アフリカ人”と一括りに語ることができないことがマダガスカル人の特色です。また、主食もお米であり、年間消費量は日本の2倍と言われるほど、お米をよく食べる国です。日本からは遠いですが、食べ物もおいしく、魅力もたくさんある国なのでこの記事を見て少しでもマダガスカルに興味を持って足を運んでいただけたら幸いです。

現在、私は青年スポーツ省に所属し、県内の 8 か所にある KIOSQUE（キオスク）と呼ばれる日本の公民館のような施設を巡回しています。主な活動内容は、日本語・日本文化の普及、遊びやスポーツ（特にダンス）の指導、啓発活動の 3 つです。利用者は 5 歳～25 歳と年齢層も幅広いですが、施設の遊び道具が不足していたり、道具の管理が行き届かず利用者の子どもの減少している等の課題もあり、ボランティアとして少しでも力になればと思いながら日々活動しています。特にアニメ、自動車、電化製品等の影響から、日本文化や日本語に対する関心は非常に高く、町を歩くたびに「これは日本語でなんていうの？」と声をかけられます。日本へ関心をもち、日本語でコミュニケーションをとろうとすることが非常にうれしく、「私ももっとマダガスカルに溶け込みたい」と思う原動力になっています。

まだまだ現地語も拙く、自分の活動に手ごたえを感じることも少なく悩むことも多いですが、現地の人の優しさに触れて貴重な体験をしていると実感しています。今後も日々感謝の気持ちを忘れずに現地の方と有意義な時間を過ごしたいと思います。



【折り紙を教えています】



【活動先の子ども達】

ラオスのルアンパバーン県天然資源環境局に派遣されている木村由佳です。

ルアンパバーンは街全体が世界遺産に登録されており、多くの観光客が来るため、ホテルやレストランの数も多く、その分ゴミの量も多いと日々感じています。私の前任者の時に JICA による環境の技術協力プロジェクトが行われており、そのときに、ラオスの中で唯一ルアンパバーンにコンポストセンターが出来ました。そして前任者がプロジェクトで行っていたホテルやレストランの生ゴミを回収し、コンポストセンターにてコンポストを作成する活動に当方も携わることとなりました。現地の作業員の 2 名とホテルやレストランを約 20 箇所、毎週 2 回回って生ゴミを回収しております。週に 1500kg ほどの生ゴミを回収しており、重い上に臭いもきついため、体力的にも精神的にもキツイ作業です。

しかしながら、これから観光客もより増える可能性のあるルアンパバーンにおいてゴミ問題は重大であり、その中でも比重の多い生ゴミの削減をすることはルアンパバーンの環境を守っていく上で大切な役割と感じています。

また、ラオスには子供文化センターというものがあり、そこにも隊員がおり、9 月から毎月ゴミに関するワークショップを子供向けにさせてもらっています。

9 月はゴミ拾いとゴミの種類の分解年数クイズ、10 月はペットボトル拾いからのペットボトルでのけん玉づくり、11 月は自分の活動先のコンポストセンターとゴミ処理場へのスタディーツアーをやりました。今後も継続してワークショップを開催していきたいと思っています。

ラオスは常夏の国であり、基本的には一年中暑いのですが、私の任地のルアンパバーンはラオスの中でも北部に位置するため、ラオスの中でも乾季明けの 11 月からは朝と夜は肌寒い日が続くようです。食べ物は唐辛子が含まれる辛い食べ物が多いのですが、日本米と似たカオチャオというごはん、カオニャオというもち米をよく食べます。お米があるため、日本人にも馴染みやすい食文化であると感じています。習慣としては毎朝お寺の僧侶たちが托鉢で街中を歩き、人々は僧侶たちにごはんを捧げます。そして多くの女性がシンという巻きスカートを履いています。

ルアンパバーンは山に囲まれて自然と共に人間らしい生活が出来る素敵な場所です。訪問お待ちしております！



【コンポストセンターでの作業】



【センターの子供たちとゴミ山前で（スタディーツアー中）】

H28-4 小林 英景 バヌアツ 栄養士 八千代市

皆さん初めまして。サント島で栄養士をしている小林英景です。バヌアツと聞いてどこにある国か知っていますか。9月に起きたアンバイ島での噴火や、バヌアツで大地震があるとそのあと日本で大地震が起きる（バヌアツの法則というらしいです）ということで日本でも話題になったので名前を聞いたことある人も多いのではないのでしょうか。

バヌアツは周りをソロモン、ニューカレドニア、オーストラリア、フィジーに囲まれ、83の島々からなる大洋州にある島国です。人口27万人、公用語は英語、フランス語、ビスラマ語の3種類、そして地域ごとに200以上の地域語が使われています。

そんな任地での食生活ですが、年間を通して食べ物がとても

豊富です。道路わきにはバナナやパパイヤ、ココナツの木が並び南の島にいと実感できます。マーケットにはパイナップルやスイカなど様々な果物とアイランドキャベツ（木に生える葉で粘りがありモロヘイヤに近い）、スス（ハヤトウリ）、カルファス（ユウガオ）、他にもトマト、ナス、人参、ピーマン、ピーナツなど日本でおなじみの食べ物も並んでいます。食べ物で困らないからか日本のような保存食の考え方は発展しておらず、干物や漬物、発酵食はあまり見ることはありません。

主食はほかの大洋州の島国と同じようにヤムやタロ、マニョック（タピオカの原料）、サツマイモなどの芋と調理用バナナが中心です。近年は米やパン、麺類なども多く出回り食の欧米化が進み、生活習慣病が蔓延しています（なんと死因の7割が生活習慣病！）。米やパンなどよりも伝統食のほうが健康に良いと思っている人は多いため決して消えていくことはないと思いますが、伝統食は調理の手間や時間がかかるため毎日作る人は少なくなっているように感じています。

最後は伝統食を紹介します。一番よく食べられているのは「ラップラップ」。これは芋や調理用バナナをすり下ろしたものをバナナの葉で包み蒸した料理です。基本の味付けは塩ですが、地域によってバリエーションがあり、中に肉や魚、貝、蝙蝠、亀などが入っているものや最後にココナツミルクをかけて食べるものなど色々なラップラップがあります。他には芋やバナナをすり下ろしたものをアイランドキャベツで巻いて蒸した「シンボロ」、すり下ろしたものにココナツの身を削ったものをまぶしてバナナの葉で巻いて蒸した「ナロット」など、似たものが多いですね。



【4月ごろの首都のマーケット】



【ラップラップ。大きく作って切り分けて食べます】

H28-4 佐原 光 ガーナ 数学教育 浦安市

私が活動をしている国は、西アフリカのガーナです。ガーナは南北に長方形のように伸びた形の国で、首都のアクラは南東に位置します。私の配属先は、首都から最も離れた北西の州・アッパーウエスト州のカレオという町にある職業訓練校です。職業訓練校ということで、生徒たちは専攻した分野の専門性を日々磨いています。専攻は、電気工学科、木工科、建設科、溶接科、服飾科の5コースがあります。

数学教育隊員ということで、その学校の生徒たちに数学の授業をするのが主な業務です。レベルは日本の高校レベルです。その他に、テストの作成、実施や、自習の補助を現在行っています。また、普通の学校での仕事の他、教員隊員が集まる理数科分科会という会の活動も行っています。ガーナは派遣隊員が多いこともあり、分科会のメンバーも現在14人おり、定例会での授業研究や各隊員の任地でのワークショップなどのイベントを実施しています。

日本の主食というと、ご飯やパン、麺類など種類がいくつかありますが、ガーナの主食にもいくつも種類があり、最もよく食べられるのが、フフという料理です。フフは、見た目も食感も作り方もお餅のような食べ物です。それ自体はほとんど無味に近いので、オクラやナッツのスープなどにつけて食べます。キャッサバやyam芋とプランテンという調理用のバナナを混ぜて、臼でついて作ります。まさに日本の“餅つき”のような光景が日々ガーナのいたる所で見られます。

次に、私の任地でよく食べられる北部の伝統料理を紹介します。TZ（ティーゼット）という料理です。ミレット（ひえ）、ソルガム（きび）、メイズ（トウモロコシ）の粉を練って作ります。モチモチのフフに対して、TZはモチモチというよりフワフ

ワしいて、例えると柔らかいはんぺんのような食感です。こちら、オクラなどのスープにつけて食べます。

仕事か休みの週末は、日本から持ってきた日本のおもちゃやアナログのゲームなどで村の子ども達と遊んでいます。私はもともと日本でもおもちゃを通じた子供達との交流をよくしていました。ガーナの子供達の身体能力の高さは、日本のおもちゃを遊ぶときにも健在で、けん玉やコマなどの足や腕の動きのしなやかさが求められる遊びはすぐにマスターし、今では私よりも上手くなってしまいました。

仕事だけでなく、休日には村人や子ども達との交流も楽しみながら残りの任期も頑張ります！



【授業風景】



【大きな折り鶴を作りました】

H28-3 松山 倫子 モザンビーク 数学教育 流山市

モザンビークには山が無い…とどこかで思っていた。思えば阿呆な話です。縦にも横にも日本の倍はある国土に無い訳がない。自分の見える範囲（海岸沿いの平野部にあるシャイシャイ市）でしか判断していない良い証左だ。内陸部に現地人が畏れ敬う山 Namuli があると知って、俄に登りたくなった。かれこれ NTC 時代に登った磐梯山以来 9 ヶ月も登ってなかったから。町からは 15km、山行きの乗り合いハイエースなんてある訳ありません。仕方がない、バイクタクシーを頼む事にしたが、幾らが適当なのか？200mt 位かな？と見当を付け、バイクタクシープールでドライバーの面構えを品定め…したけど皆目判らない。比較的良さそうな人物に値段を尋ねるも「1500」却下。続けて「2000」論外。思えば若い男性の人物鑑定は端から匙を投げて、センスを研いてこなかった。答え合わせも問題解きもしないのに習熟する訳がない。

諦めて、昨日の内に仲良くなった干物売りのおいちゃんを頼る事にした。「おとつあん、15km 先の Namuli 山までって幾ら位？100~200 位かなあと思うんだけど、あいつら 1000 とか 2000 って言うんだよね」言うが早いか、ちょっと待ってろと言い置いて、すぐ若者を連れて来て、片道 200 で、帰りのために電話番号を訊いておくように、とアドバイスしてくれた。早速後部に跨り、問題があれば指摘しようと構えたけど、電話などの脇見もせず、スピードも出し過ぎず、ますますの安全運転をしてくれたので、「私一人の為に往復するんだから、ちょっとチップを上げようかなあ」などと考える間に登山口（？）に到着。

すると「2000mt で山頂まで連れてってやろう」と言い出すのでゲンナリ。第一に独りで登りたい。第二にカネが無い。と断り、帰りの為に電話番号を教えてくれと言うと、電話は持っていないときた。しまった、来る道道作戦を練られたのかな？不精無精 1000 なら払える、と言って商談成立。トホホ、と思ってたけど、結果的に良かった。ヒマラヤの時と違って地図も無いし、本当にローカルな獣道ばかりだったので、彼が居なければ登頂出来なかった。

途中途中、沢の水を飲んだ。水も空気も甘くて旨い。人為的に植えたのではないかと思うほど、色とりどりの花々が咲き乱れている。グラジオラスの原種と思しき花、ロベリアの原種と思しき花、野生のアロエ、青白い踊り子草のような草は踏むと薄荷の香りがした。

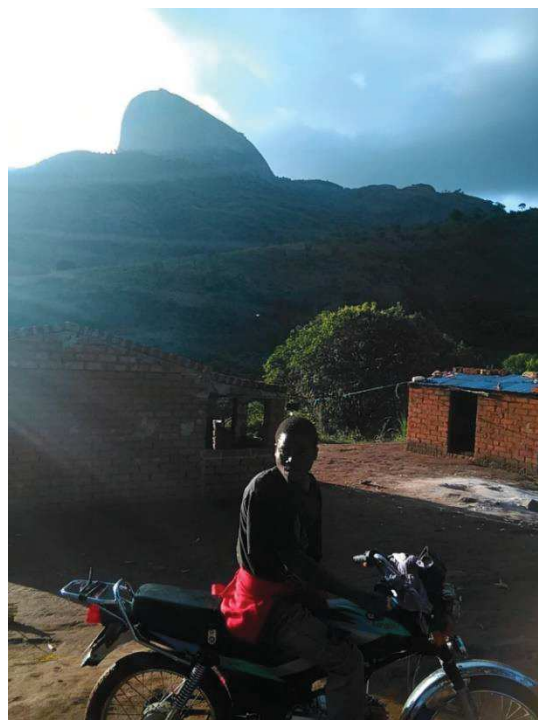
僅かな平地にはバナナやサトウキビが植わっている。こんな所にも人の暮らしがあるのかと感慨深い。

途中、軍隊アリに襲われた。全身に噛み付かれ、悲鳴を上げて逃げ、靴、靴下、ズボンを順次脱いで払った。余りのハプニングに思わずゲラゲラ笑った。

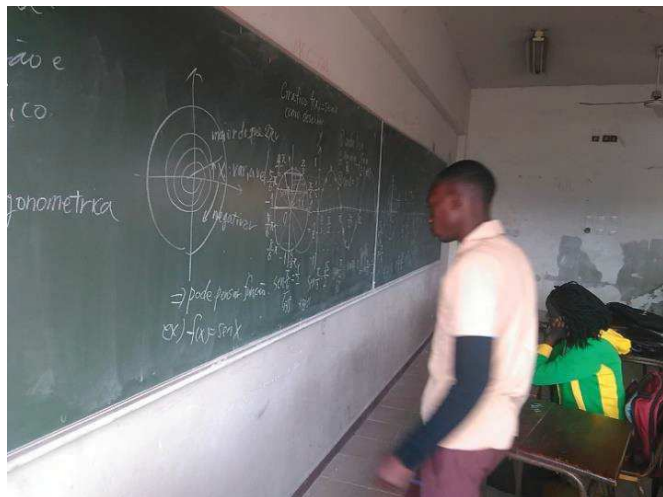
山頂は巨神兵の頭蓋骨みたいな巨大な岩塊で、急斜面に生えた球根植物を足掛かりによじ登った。見ると岩肌に種々の苔が生えている。目も眩むほど数限りなく生えては朽ち生えては朽ち土を醸成して、そのまた上にこの植物がしっかりと根を張り、お陰で今私が登る事ができる。

正午頃やっと登頂。しばらくすると、地元民と思しきおじさん 2 人が現れた。見ると裸足だ。現地人の身体能力には本当に舌を巻く。聞けばここは登りたかった Namuli ではなく Malessa 山だという。残念だが、だからと言って山の魅力が損なわれるわけではない。

ひとしきり展望を愉しんだので、もう帰ろうよ、と声をかけると、青年はなんでさ？と取り合わない。まあ良いか、と眺めていたら、どうやら本当に興奮しているらしい。なんでも、登ったのは初めてなんだそう。それで良くガイドを申し出たなオイ。と、呆れつつも、青年が無性に妬ましくなった。



【ガイドの青年と山】



【普段の活動風景（三角関数の単位円を教えようと奮闘しましたが、何故か幾何的なアプローチが軽んじられていて、苦勞しました）】

H28-4 松井 香保里 バヌアツ 看護師 船橋市

保健省公衆衛生局予防接種拡大計画課（以下 EPI）に配属されています。配属部署の業務内容は、予防接種に関すること全てです。ユニセフへのワクチンの発注と受領、地方へのワクチンの発送、データ管理、看護師への教育、新しいワクチンの導入、等々をユニセフの協力のもと行っています。その中で、私はワクチンのストック管理、品質管理を担当しています。具体的には温度変化に敏感なワクチンを適正な温度で管理すること、在庫切れを防ぐため必要数と在庫数の確認、ユニセフへのレポート作成、地方へワクチンの発送、地方事務所のワクチンの品質及び在庫管理の指導などです。

バヌアツは約83の島からなる国です。共通語はビスラマ語、英語、フランス語ですが、数えきれないほどの地方言語が存在します。首都より船で5分の島ですら、まったく異なる言語を話しています。ビスラマ語を話すと、バヌアツ人はとても喜んでくれ、すぐに打ち解けます。

バヌアツ人の性格は心も時間もゆったりなのんびりです。大変おらかで、優しいです。時間については他の途上国と同様、待ち合わせや会議開始時間などはあってないようなものです。先輩隊員のおかげで、バヌアツ人の協力隊員への印象は大変良く、バヌアツ人のおらかで優しい性格も相まって活動には大変入りやすい印象があります。道端で「●●はいいやつだった。元気してるのか？」と、何年も前の隊員の名前を言われることもありました。

赴任して6か月たったころ、同僚が私の前で、「ショウワ ナイヨレン」とたまに言うようになってきました。意味が分か

らなかったで、「どういう意味？」と聞くと、「かおりがいつも言ってる日本語だよ！ハハハ！」と。よくよく聞いてみると、

「ショウワ ナイヨネ」

「ショウ ガ ナイヨネ」

もしや、、、そうです。「しょうがないよね」。よく言っています。ワクチンがスムーズに地方に届かない、母子手帳を印刷するお金がどうにもならない、注射器がバヌアツに届いてかれこれ4か月も港にあり担当者が取りにいかない、、、いつも「しょうがないよね」と笑って言っていました。そして、「かおり、あとこれも覚えた。オレ アレー！」これはジェスチャー付きなのですぐにわかりました。両手を万歳のように上げるジェスチャー。そうです。「お手上げー！」いけない、こんな日本語を覚えられてしまっとは思ひ、「これはね、もう他にやりようがない、待つしかない、あきらめっていう意味なんだよ。こんな言葉使っちゃだめだめ。」と説明しました。しかし、同僚は気に入っているのか連呼しながら、彼の部屋に戻っていきました。そんな時、地方から電話がありました。「ワクチンが届かないよ。」との連絡です。経由地のオフィス、航空会社の電話、メールなどありとあらゆる方法を使いましたが行方はつかめませんでした。気が付いたら私はこう口走っていました。「もう！しょうがない！おっ手上げー！」



【ワクチン管理の工夫】



【地方スタッフにワクチン保管温度について説明】

H28-3 竹中 由里子 スリランカ 作業療法士 佐倉市

(アーユボワン) 初めまして。28-3 作業療法士の竹中由里子と申します。私は、スリランカの南部州にあるゴール県の県庁社会福祉センターへ CBR (community based rehabilitation) の要請で来ています。早いもので任地へ来て9カ月が経ちました。私は、スリランカへ来て早々、デング熱に罹ってしまい、他の隊員よりも遅いスタートでした。活動も初めの頃は、言語がほとんどわからず、文化や習慣に戸惑う事も多く、「日本へ帰りたい」と思うこともしばしばありました。しかし、今はここでの生活や人々との関わり方にも慣れ、自分の居場所が少しずつできてきているのを日々実感しています。

現在は、県下にある郡オフィスに行き、郡オフィスの社会福祉官と共に障害を持った人達の家や集会、入所施設等を回り、自宅や施設の生活環境の改善や自主トレーニング指導等を行っています。スリランカでは、医療分野では私のような専門職がありますが、福祉分野では日本と違って、現地の専門職はほとんどいないのが現状です。そのため、病気やケガで入院してリハビリしても、自宅等へ帰ってからのフォローアップを行う場所がほとんどありません。そのような方々に、杖や歩行器などの福祉用具の導入、ベッドの高さ調整、生活の工夫や外出時のアドバイス等を行います。少し専門的なアドバイスをするだけで、生活環境が大きく変わる方もいます。各郡の社会福祉官に専門職の必要性を訴えつつ、障害を持った方々がこのスリランカで少しでも生活しやすくなるよう活動に励んでいます。

ここでは皆自由です(笑)その時、その時を生きています。なので、予定はおおよその目安で急な変更は当たり前。人のことよ

り自分の事。日本での常識がここでは常識ではありません。前日に「明日会議があるから何かプレゼンテーションして」と言われ、急いで資料作るも、次の日会議がいつまで待っても始まらず、同僚に確認すると、「上司が来れなくなったから、今日はなくなった」と、こちらから聞かないと言ってくれない…。このような事が日常茶飯事で起こります。良い意味で言うと、皆柔軟性があり、温厚で自分を大切にしているのだと思います。それについては、未だに理解はできませんが、8カ月も経つと自然と受け入れている自分がいます。このような彼らとの違いを今は楽しめるようになってきました。残りの任期も、彼らとの違いを楽しんでいきたいです。

私はデング熱で、スリランカで初の入院生活を体験しました。そこでも驚くことがありました。基本的に食事は3食スリランカカレーで、ティーの時間もあります。カレー味のコロックみたいなおやつも一緒に付いてきます。スリランカでは病気でカレーなんです(驚)私は、吐き気があり、全く食べられず、飲めずでした。また、看護師さんはナースコールを鳴らしても、なかなか来てくれません。しかし、お小水チェックの時には必ず来ます。お小水管理にはとっても厳しい看護師さんです。

国が違うだけで、こんなにも考えや生活習慣が違うのかと毎日驚きの連続です。多分彼らも私と一緒に過ごして自分達との違いに驚いていることも多いと思います。これからも、お互いの違いを楽しめる関係をたくさん作っていきたいです。



【障害を持った子供達の放課後スクール】



【障害者自助グループミーティングにて】

4. 協力隊ナビあれこれ

平澤昭男（43/2、フィリピン、稲作）

青年海外協力協会(JOCA)では2010年8月から各地で協力隊ナビを開催しており、千葉県OB会でも原則毎月第4土曜日にJR新浦安駅に隣接している浦安市国際センターで開いています。私は2年ほど前から県在住のOBとして、協力隊参加に関心を持ってナビを訪れる方々の相談に乗っています。JOCAのホームページでは「ナビで協力隊経験者と語ろう」と呼びかけられていて、参加する人たちはきっと帰国したばかりのOBやOGのフレッシュな話を楽しみに来られると思うので、部屋に入った途端に古希を越えた爺さんが座っているのを見て、来る場所を間違えたかと戸惑うのだろうなあと、毎回気の毒な気持ちになります。フィリピンOBと言っても、私の隊員経験は半世紀ほど前のことなものですから。私が相談に行く立場になっていることを想像しても、やっぱりほかほかの湯気が立っている現地の話を期待しますから、彼ら、彼女らの落胆は容易に想像できますよね。県OB会では帰国後間がないOB、OGで参加してもらえる方を探してはいるのですが、県内在住でも会場から遠いとか、仕事で時間が思うようにならないとかで、結局は年寄りだけが座っているという事態になるようです。ほかほかの体験談を聞けるのはラッキー・・・かも。

年2回の募集時期には全国で募集説明会なるものが行われ、千葉県でも千葉市、船橋市などで開かれます。協力隊ナビは協力隊事業への理解を深め、応募のきっかけを生むことが目的とされていますが、募集の時期には説明会を補うことに重点を置き、関連情報や提出書類の作成方法のアドバイスなど、協力隊事業への参加実現に向けての進行になります。募集説明会は参

集者が多く、聞きたいことがなかなか聞けないといったことが起こりがちで、説明会に行ってももっと詳しいことを聞きたいと言ってナビを訪れる人も少なくありません。殆どマンツーマンで対話をする訳ですから結構詳しい話ができていないでしょうか。いわばオーダーメイドの説明会です。

協力隊に関心を持ったきっかけとして最近目立つのが、テレビの「世界こんなところに…」的な番組でときどき登場する「昔、協力隊員として活動していた」という人の話を聞いて、というものです。番組では普通なら行かないようなところに住んでいる日本人を取材するケースが多いように見受けられますが、そういう非日常的な姿に強いインパクトを受けられるのでしょうか。

ナビでは隊員たちの活動の一般的な活動・生活の姿、よく直面する問題や困難などについて話すのはもちろんですが、めたく協力隊員として赴任した場合に知っておくと強みになったり、活動の助けになるようなことについても話すことにしています。必ずしも技術や語学に直結しなくても心構えとして持っておくことで活動や生活が容易になったり潤いを持ったものになる事例は沢山ある訳ですから。

30年余りのJICA業務では多くの隊員たちの現場を見、報告書を読み、そして帰国時の報告を聞きました。それらの中からこれから協力隊に参加しようとする人たちにとって参考になることが山ほど得られますが、中でも毎回話していることが、「技術をどのように活かすか」「どうすればことばが上手になるか」という直接的なことより、活動地で自分という人間をどうして受け入れてもらうかということを考えるべきだと言うことです。趣味を生かすもよし、現地の人たちからいろんなことを学ぶもよし。遠回りかもしれませんが、それが結局自分の技術を活かすうえでの必須アイテムだろうと確信しています。普段からそれを考えることは日本での生活にも役立つことですし。

昔の協力隊事業と違って、今は協力隊事務局とOB、OGが密接な連携を取り合う状態ではなく、ましてや家族的な協力関係など想像できないのが実態でしょう。でもこの事業には昔のJICAで言われたように「国づくり人づくり心のふれあい」という気持ちが不可欠です。かつての協調を復元するのは無理にしても、せめて千葉県出身（または県在住）の隊員や帰国隊員とOB会の間に良好な連携が築かれることを願い、ナビをその入り口として充実させることを夢見ているところです。

【相談員募集】

協力隊ナビは原則2名の相談員で開催したいと考えています。平澤相談員の寄稿文にも書かれていますが、若手の相談員はと

ても必要ですが、見つからないのが大きな悩みです。理想形は協力隊事業を熟知しているベテランと帰国して間もない若手の組み合わせです。協力隊志望の動機も昔と今では相当に変化してきているように感じますので、若手の経験談はこれから応募しようとする若者にとってはとても有意義なものです。

相談員には謝金と交通費を準備していますので、是非ともご協力ください。当会の代表アドレスにご連絡いただければ折り返し相談員の手引きなど詳細をご連絡いたします。

5. 年会費納入に当たってのお願い

毎度のお願いではありますが、年会費（一口 1,000 円）の納入をお願いします。本年度は 12 月 15 日までに 105 名の皆さんから 15 万円を少し超える会費をいただいています。ただ、本年度は「目標 200 名 30 万円」を掲げていたもので目標達成率は 50% くらいです。昨年度は 144 名 20 万円強の実績でしたので、次回の総会での決算では厳しいご報告が想定されます。会の活動が活発化する中、軍資金は多いに越したことはありませんので、皆さんのご協力を切に願います。

また、会費の年度区分ですが、当会の会計年度に合わせて当年度分は 4 月 1 日から翌年の 3 月 31 日までの期間としています。ご存知のように年会費の振込用紙は会報の夏号（8 月発行）に同封していますので振込の際はご利用ください。4 月の総会時に現金でいただくこともあります。大多数はゆうちょ銀行口座へ振り込んでいただいています。JOCA の財政が厳しさを増す中、共同事業費として JOCA から受領している資金が減額または廃止されるかもしれませんので、そうなった場合は会費が OB 会活動の正に生命線になります。今後とも会費納入に引き続きご協力いただくよう、よろしくお願いします。

なお、振込に際し「住所、氏名」は必ず記載されているものの、「隊次」や「派遣国」が記載されていないことも多く、納入者リスト作成上困っています。お手数ですが、必ず「隊次と派遣国」を書いていただくようお願いいたします。

6. 編集後記

今回の会報のページ数は過去最高の前回と同様の 20 ページとなり、嬉しい悲鳴が続いています。これは派遣中隊員からの寄稿が多かったからですが、対象者 21 名中 16 名が寄稿してくれましたから寄稿率は 76% を超えています。派遣前の県庁表敬後に壮行会を千葉県育てる会と共催で開催し、新隊員には会報への寄稿をお願いしてきた結果と考えています。派遣中隊員からの寄稿文を読んでいつも思うのは、今の隊員もみんな精一杯頑張っているなど言うことです。

南北問題から始まって東西冷戦終結、今やイスラム過激派台頭による政情や治安の悪化など安全安心な日本から海外にわざわざ出かけようとする若者は減少していると言われていたのですが、時代は変わっても開発途上国でのボランティア活動という志を持った若者はまだまだ一杯います。応募者の減少に歯止めがかからない状況は少しも改善されていないように思いますが、それでも地道な努力で広報や応募相談などを行って行くしか方法はありません。

協力隊事務局では帰国隊員に対して「社会還元」を声高に叫んでいるようですが、体験者集団としての OB 会の役割は決して小さくはありません。次の 50 年がどのようなものか全く見当もつきませんが、「元気があれば何でもできる！」とアントニオ猪木議員も言っています。協力隊の元気のお裾分けを皆さんと一緒にやって行きたいと思います。現役隊員は任国で、我ら OBOG は千葉県内において。今年も良い年でいたいものです。

～お知らせ～

ホームページのご紹介

当会ホームページにて、定例会/協力隊ナビ/講演会/懇親会等、各種イベントのスケジュールや、活動報告を掲載しています。URL は下記ですが、「青年海外協力隊千葉 OB 会」で検索していただくことでもアクセスできますので、是非ともご覧ください。

青年海外協力隊 千葉 OB 会 ホームページ： <http://www.jocvchiba.net/>

メーリングリスト/facebook グループのご案内

上記ホームページにて、当会のメーリングリストと facebook グループへの参加をご案内しております。是非ご参加ください。

連絡先 お問い合わせや会報への寄稿は info@jocvchiba.net までお願いします。